

堀畑 正臣（国語学・国文学）

古記録資料の国語学的研究

本論文は、変体漢文で書かれた古記録について、日本語の歴史的研究の観点から検討を加えたもので、古記録の語法を中心に考察した第一部と、古記録の文章、用語について考察を加えた第二部を中心に構成されている。

古代・中世には公家・僧侶などが個人で記した私的な日次記、朝廷・幕府などで作成された公式の日記など変体漢文で書き記された記録文が多量に残されているが、これまでその言語について正面から問題にされることは比較的少なかった。漢字で書かれた変体漢文体であるため、日本語としてその音形式を同定しにくいというのがその最大の原因であるが、本研究は、説話集や軍記物語、かな交じり記録資料など、変体漢文体の古記録と文体

・用語等で深い関連をもつと思われる資料を広く求め、それらと事象ごとに逐一比較検討することによって記録語解明の手掛かりを得ようとしている。古記録の語法を取り上げた第一部の、特に第三章「ナサル」の成立は、この語が古記録の中で使われはじめ、「～ヲ被成（ナサル）」の「～ヲ」の受ける語に限られた名詞から次第に動詞的なものに拡大し、ついには「オ話シナサル」のような敬語補助動詞に発展していくことを、中古・中世の多くの記録資料、および記録語と密接な関係にある『太平記』をはじめとする軍記物語、抄物等周辺資料を駆使して明らかにした。第四章「（サ）セラル」という敬語の成立についても、ほぼ同様の手法が用いられる。上位者が人を使って何かを行うことを「（サ）セ+ラル（使役+尊敬）」のかたちで表現することが古記録で行われていたが、この語法が『平家物語』などの軍記物語（和漢混淆文）を経て弘通するようになり、室町時代には、人を使っての使役の意が薄れ上位者自身の行為と解されるようになって「（サ）セラル」全体が尊敬語化したことを明らかにしている。この「（サ）セラル」は、やがて口頭語で「行カッシャル」「上ゲサシャル」のかたちで盛んに使用されるようになるが、「ナサル」（方言でナハルのかたちで行われている所もある）の場合と同様、変体漢文の記録語が後世の口頭語の源流の一つになっていたことを明らかにした。

第二部は、平安時代の古記録の文章、用語等について検討を加えたもので、この方面の研究も従来はなほ手薄である。実用的文章と思われるがちな古記録の中に多彩な文飾を施したものがあること（第一章）、古記録の文章に唐代口語の影響が見られること（第三章）を論じた。日本書紀、続日本紀、万葉集、日本漢詩文等への唐代口語の影響は論じられていたが、古記録への影響は本論によってはじめて具体的に論じられた。第四章は、古記録のなかに「婿・縁戚」の意の「因縁」という語を発見、『宇津保物語』の本文、従来の解釈等に一石を投じた。また、第一部と同様、変体漢文の系列を引く漢字カタカナ交じり文の周辺資料に根拠を求めて、古記録語「挙頭〈カウベコゾリテ〉」（第五章）、「候気色〈ケシキヲウカガフ〉」（第六章）などの読み、意味用法を明らかにしている。

以上、記録語を記録資料の中だけで論ぜず、広く周辺資料と関連づけながら論ずるという新しい方策を試みることによって、記録語の重要な一面を明らかにし、この分野の研究を大きく進展させることに成功している。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。